

矢口 悅子 著 『イギリス成人教育の思想と制度  
—背景としてのリベラリズムと責任団体制度—』

## 市民教養教育の伝統=“Great Tradition”は現代にどう生き残るか

島田 修一\*

本書は、従来から英国成人教育の特質とされてきた「リベラリズム」と「ヴォランタリズム」について、その思想史的・社会史的考察を通してその性格と構造を問い直し、現代に至るまでの変容過程を外的条件の変化がもたらした影響や関係者の自覺的努力を仔細に考察・分析することによって、成人教育が人間解放の力を生み出すという教育本質的な機能をいかなる意味において果たし得たかを描こうとした力作である。

その際、他国に例を見ない「責任団体」=Responsible Body の制度<sup>(注)</sup>に注目し、その創設と発展及びその再編・解体の危機状況の中で露わになつたその制度の矛盾を分析することによって、この「リベラリズム」と「ヴォランタリズム」がいかに現代まで生き抜いてきたかを明らかにしようとしているところに、本研究の際だった特色と大きな意義がある。

本文366頁に加え42頁にわたる文献・事項索引を付した本書は、研究の目的、先行研究の整理、研究方法と本書の構成をわかりやすく述べた「序章」を受けて、第1部「イギリス成人教育におけるリベラリズムと責任団体の成立」においては、自由主義の伝統と労働者の意識の発展と大学の自覺の高まりに裏づけられた成人教育の歴史を踏まえて、責任団体制度の成立過程が詳細に且つ鋭い分析を含めて叙述され、第2部「責任団体制度の変容とリベラリズム」においては、第2次大戦後の成人教育政策の展開過程での責任団体の位置と機能の変容状況が、冷戦構造下での矛盾の深まり

と抵抗、時代変化のもとでの人々の意識の変化や政策の変更、さらには経済的要請を受けた人材養成政策の展開下でついに責任団体制度の廃止を含む成人教育再編に到るまでが鮮明な著者の問題意識に貫かれながら明晰に分析されている。

従来から英国成人教育の特色の一つにこの「責任団体」制度が挙げられるのが常であったが、これを真っ正面から取り上げしかもその性格と機能の変容過程に即して英国成人教育の本質とされてきた「リベラリズム」と「ヴォランタリズム」の担われ方をこれほどまでに丹念に解明した研究はなかった。この方法を取ることによって、「リベラリズム」のイデオロギー性と「ヴォランタリズム」の制度的矛盾が、両大戦間と第二次大戦後の冷戦構造の政治状況の中でどのような展開を見せたかを生き生きと描くことができ、成人教育における公共性の内実とその保障原理を解明する一つの鮮明な研究視角と方法論を説得力豊かに提示することができた。

ここには、すでに両大戦間の成人教育の変容過程を実証的に分析してきたエクセター大学のフィールドハウス教授の業績に触発されそれに深く学ぶ誠実な姿勢と、内外の数多い先行研究を貪欲に摂取しつつこれらを乗り越えようとする大胆な手法が貫かれ、英国成人教育研究の高い水準を獲得している。しかもそこには、意欲的な研究に時に見られる奇をてらう試みや危うさは一つとしてなく、きわめてオーソドックスな研究方法が貫かれている。すなわち、英國社会思想史の豊かな

\* しまだ しゅういち 中央大学

知見の獲得の上に立った教育の歴史事実の確認を、キリスト教の教義普及や、救貧と生活の自立に役立つ読み書きと有用知識の普及に始まる庶民教育から、労働者の地位向上と自己解放につながるさまざまな教育運動のダイナミックな展開の中ですすめつつ、それを生み出し時に牽制した時にこのような運動を反映してそれを支える条件を内包させていった法制度や諸報告書に関わる膨大な関係資料の丹念な検討を行い、全体として英国成人教育史の確かな概観を得ることに成功している。その意味では、本書は初心者への親切な入門書的機能も持つのであるが、歴史的事実の背後に突き刺さる鋭い観察眼がえぐり出してくる問題提起は多分に論争的であって、英国成人教育研究に関わる者にとっては大変刺激的である。

従来多く見られたような、単に「リベラリズム」と「ウォンタリズム」の流れを確認するにとどまる成人教育史ではなく、その理解と制度的定着の多様性に着目してそこに見られる矛盾の展開過程の考察を軸に英国成人教育史研究を試みることは、これまでの英国成人教育史の全体的な再把握を求めるものである。もちろんこの点は従来の研究においても自覚されてきたところであった。実際に、労働者の知的成長と地位向上を目指した Mechanics Institute (職工学校と訳される) や Workingmen's College のほか、協同組合運動や労働者自身の社会的解放を課題とした Chartism 運動などと、「大学拡張運動」や「大学構外教育部」=Extra-mural Department のように大学自身による自覺的な教育活動、またそれぞれの時代の政府の方針や幾多の法令や報告書などとの緊張を孕む連携の歴史を「責任団体」制度の成立と展開の過程を含めて描いた英国成人教育研究も少なくはない。しかし、本書で試みられたように幾多の研究者の間で交わされた興味深い論争の紹介や分析は乏しく、その論争そのものの中に、変容を強いられる「リベラリズム」と「ウォンタリズム」

の保持をめぐる苦悩に満ちた葛藤を見てそれを描くことはなかったため、成人教育史の叙述は事実史の域を超えていた。本書はこの意味で一つの成人教育思想形成史を試みたものともなっている。

近年、社会的不利益層の教育要求に応えるコミュニティ教育運動の実践を踏まえた研究が（従来の伝統的な成人教育にどのような影響を与えるかという分析も含めて）精力的にすすめられており、新たな時代の Liberal Adult Education の方が探求されているが、これらを含めて英国成人教育史を統一的に把握する方法論はその必要性を含めて充分に論議されてきていない。

この意味で、著者がこの壮大な研究の動機をきわめて謙虚に英国成人教育の特質とされる「当たり前のこと」の究明であったと述べて、上記のような問題意識と研究方法をもつ「責任団体」研究を通して、この課題を切り開く重要な道を示した意義はまことに大きい。しかしながら、この課題に応えるためには「責任団体」研究にとどまるわけには行かない。それを著者も自覚しているだけに、この「当たり前のこと」の「究明」(それは言葉であらわせば「リベラリズム」となり「ウォンタリズム」の解明となる) とは、実は歴史的な意味における「庶民の教育要求」の本質を明らかにする課題に他ならず、それは、英国成人教育の特質の把握に関わる研究の根本的な問い合わせの提起として私には映る。

以下、私の研究関心にかかわって若干の感想を述べて書評に代えたいと思う。

時代を担い拓く民衆の教育要求は、たとい目に見える形で現れるとことがないにしてもそれを反映した教育活動を呼び起こし組織するものであって、それを描いてこそダイナミックな教育史たり得るというのが年来の私の主張である。「責任団体」研究も、その意味で民衆の教育要求の状況をどう反映しそれをどう発展させていったかという

側面が深められなければならない。

本書では、時代ごとに見られた広い領域にわたる民衆の教育要求の存在状況にも言及があり、かの有名なラスキンカレッジ・ストライキに見る社会科学の学習内容をめぐる紛争はもちろんのこと、Extra-mural Department の教育内容をめぐる一般教養教育重視にかかるいわゆる “Great Tradition” 論争も取り上げられており、また「労働者」概念の変容に伴う Workers’ Educational Association (WEA=労働者教育協会) の名称や教育活動内容をめぐる議論も紹介されている。さらに、近年の「サッチャー行革」下の経済政策と結びついた人材養成策と LEA (Local Education Authority=地方教育当局) の権限削減を伴う継続・高等教育改革のもとですむ資格取得的教育体制への傾斜を含んだ成人教育の変容状況も的確に描かれている。しかし、著者自身が述べているように本書のテーマから来る研究方法上の限定があるため、WEA 以外に民衆の教育要求そのものの変化や発展に伴う民衆教育運動自体の展開の歴史は描かれていない。

しかし、英國成人教育史を全体として描く課題に即して言えば、民衆教育運動史自体を視野に入れた研究が必要であり、社会史的な研究方法も求められるところであろう。

例えば Bernard Jennings は、その著 *The Education of Adults in Britain* (1985)において英國には二つの “University Extension” があるとし、大学拡張講座の誘致のほかにさまざまな民衆教育活動のあった地域に新たな大学が生まれた歴史を描いている。ノッティンガム大学の場合は、Mechanics’ Institute のほか Artizan’s Library や People’s College, People’s Hall などの学習文化機関をはじめとする民衆の学習活動が盛んであったことが篤志家の心を揺さぶり、多額の寄付による新大学(ユニヴァーサティ・カレッジ)が設立された事実があり、David Wardle の *Education and Society in Nineteenth*

*Century Nottingham* (1971) には、1837年に開設されていた Mechanics’ Institute の学習内容がやがて労働者たちの不評を買うようになっていく中で、関係者はそれに代わるものを探しようとケンブリッジ大学に書簡を送って拡張講座の開講を実現させた (1873年) という興味深い経緯が描かれている。新大学設立当初から成人教育学部をもち、英國初の成人教育の教授席がここに設けられて意欲的な成人教育活動が展開されたのも、民衆の間の学習要求の高まりがもたらしたものと見ることができる。この緊張関係のあるところ、成人教育における「リベラリズム」も「ヴォランタリズム」も保持され健全に発展していくであろうが、その緊張関係が失われたとき「責任団体」はその「責任」を負いきれなくなる。それはどう保持され得るのか。

かつて “Great Tradition” を受け継いで *The University in Its Region* (= 地域に根ざす大学) (1977) を刊行し、革新の気溢れていたこの地に刻み込まれていた民衆の学習運動の歴史を誇っていたノッティンガム大学は、近年の広報誌では地域産業振興に役立つ研究と企業派遣学生を含む人材育成に力を入れることをうたっている。一方、FEFC (継続教育補助金委員会) の管轄下に入った WEA もその1994年の Charter では労働者対象の講座の継続をうたいつつも一般市民対象の教養学習機関であることを強調しているが、果たしてこれは “Great Tradition” の継承者たることの宣言であろうか。私には成人教育再編下でもはや「責任団体」の榮誉と特權を持ち得なくなってしまった WEA が新たな補助金制度に屈した姿に映る。“Great Tradition” はこれからどう生き続けるのであるか。

再びノッティンガムへのこだわりを語りたい。かつて地域と結びついた新しい学校として高い評判を得たサットンセンター Sutton Centre が、コミュニティスクールの域を脱して、近年のコミュ

ニティエデュケーション運動の高まりを反映した福祉・健康・職業再訓練などを含む地域づくり活動の拠点としての成人教育機関として再組織されている事実がある。私は、かつての一般教養教育=Liberal Adult Education（私自身は「市民教養教育」と訳す）は、Education for Liberation of Adultsとして再構成されるべきと考えるが、その具体的な内容は、いま Sutton Centre で試みられている学習活動にその方向が示されているのではないか。現代に引き継がれるべき “Great Tradition” をここに求めてみたい。

著者が参考文献に挙げている Richard Livingstone の *The Future in Education* (1941) は、‘From Adult Education to The Education of Adults’を、その著 *Adult Education in England and Wales* (1970) の第1章のタイトルにしていた John Lowe が‘Key Works’に挙げていたものであった。Sir Livingstone が生涯にわたる人間発達の内実を豊かにする教養の内容をどう問い合わせ、Lowe がそれをどう受け止めていたのか。著者の見解をお聞きしながらあらためて学びたいと考えている。

なお、あえて注文をだせば、視野広く重要文献を網羅して Graham, B. や Harrop, S. ら「ヴィクトリア期成人教育研究」グループの研究成果まで目を届かせているだけに、例えば Kelly, T. の大著 *A History of Adult Education in Great Britain* の第三版(1992)の‘PREFACE’と長文の‘PROLOGUE’が力を込めて近年の英国成人教育の新しい動向について丹念でしかも好意的な見解を示している事実についても紹介してほしかったし、上記の Jennings と Lowe の二書なども参考文献に付け加えてほしかったところである。

#### (注)

成人教育の普及を担うにふさわしい自立的な団体に公費でその人件費の75%を援助してその活動の振興をはかる制度。ただしその対象は大

学、WEA など有力団体に限られる。

#### 本書評でとりあげた文献一覧

- Jennings, Bernard (1985) *The Education of Adults in Britain* (Newland Papers Number Ten). The University of Hull, Department of Adult and Continuing Education.
- Kelly, Thomas (1992) *A History of Adult Education in Great Britain* (the 3rd edition). Liverpool University Press.
- Livingstone, Richard (1941) *The Future in Education*. Cambridge University Press.
- Lowe, John (1970) *Adult Education in England and Wales*. Michael Joseph.
- Thornton, A. H. & Stephens, M. D. ed. (1977) *The University in Its Region*. Department of Adult Education, University of Nottingham.
- Wardle, David (1971) *Education and Society in Nineteenth Century Nottingham*. Cambridge University Press.

\* 矢口悦子『イギリス成人教育におけるリベラリズム—責任団体制度を中心に—』によって1998年3月、お茶の水女子大学より学位(人文科学)授与。

(新曜社刊 1998年  
A5判 366+42頁 定価 5,500円)